様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２０６６

研究課題名（和文）中高生への子宮頸がん予防啓発に向けた教育支援ーピアエジュケーションの実践と評価ー

研究課題名（英文）Educational support regarding cervical cancer prevention among junior and high school students -Intervention and evaluation by peer educaion-

研究代表者
砂川　洋子（SUNAGAWA, YOKO）

琉球大学・医学部・名誉教授

研究者番号：００１９６９０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：第一段階研究は、沖縄県内の中高生を対象とし、子宮頸がん予防啓発などを含むがん教育を推進することを目的として質問紙調査を実施した。その結果、中学生、高校生において、がんに対するネガティブイメージ、がんの知識や理解不足、子宮頸がんの知識や理解不足、体験者の講話を取り入れた教育支援の希望は高いことが明らかとなった。第二段階研究では、教育プログラムを構築して、がん体験者も活用しての教育セミナーなどの介入を行った結果、子宮頸がん予防に関する知識の獲得、将来の検診受診への行動変容などの意識改革につながった。今後の学校現場における子宮頸がん予防啓発の促進には、継続教育支援の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究においては、未来を担う中高生が自他の健康増進獲得への意識の高まりにより、いのちの大切さやがんの早期発見などの予防行動への意識変容は意義深く、また、沖縄県においては、若い世代の子宮頸がん罹患率や死亡率の減少に貢献できる点でも意義深いと考える。加えて、今回、沖縄県内の中学生、高校生を対象とした「がんやがん予防に関する意識調査」を広域的に調査研究し、その結果を各中学校、高等学校に調査報告書としてお返ししていることにより、今後の学校現場における「がん教育」への継続教育支援に貢献できる点も意義深いと考える。

研究成果の概要（英文）：In the first stage research, Questionnaire survey was conducted with the aim of promoting cancer education (including understanding of cervical cancer and awareness prevention), the subjects were junior (N=1,268) and high school students (N=1,911) in Okinawa prefecture. The results of this survey revealed that the negative image of cancer and the lack of understanding and interest in cervical cancer. In addition, they were hoping for educational support that lectures of the experienced cancer. In the second stage research, an educational program was constructed and educational seminars were held for those who experienced cancer. As a result, educational seminar helped to gain knowledge about cervical cancer prevention and change the behavior for future medical examination of them. Furthermore, it is suggested need for continuing education support in order to promote education of cervical cancer prevention at school sites.

研究分野：がん看護、緩和ケア

キーワード：がん教育　子宮頸がん　中高生　予防啓発　教育支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）2007 年、がん対策基本法が制定され、それに基づき策定されたがん対策推進基本計画における分野別施策のひとつに、児童生徒を対象とした、学校におけるがん教育・普及の必要性が提言されている。日本人の２人に１人ががんに罹患する時代において、がんそのものの理解やがん患者に対する正しい認識を深める教育は従来まで不十分であるとされ、児童生徒ががんについて関心を持ち、がんの予防、早期発見・検診について正しい知識を身につけ、適切な対処や行動変容ができることが重要であり課題とされている。既にいくつかの県や地域ではモデル事業として取り組みが開始されているが、沖縄県ではその取組はまだ始まっていない。

（2）県内においては従来までに、学校現場における「がん教育」に関するニーズ調査や介入と評価などはこれまで行われておらず、特に、子宮頸がん予防ワクチン接種の積極的推奨の差し控え（平成 25 年 6 月；厚労省）の後の生徒や保護者などの不安は残されたままになっていることなども、正しい情報提供による支援が必要である。また、我々は 2012 年に、沖縄県内中高校の養護教諭を対象として、子宮頸がん予防・啓発に関する調査を実施しており、その結果、予防ワクチン接種の相談や対応に関して、生徒や保護者からの質問や相談対応へ困難感を抱いていたことなどを明らかにし、がん教育においては、専門家との協働や保護者などへの啓発指導も必要なことを明らかにしてきている。

２．研究の目的

（1）沖縄県内の中高生を対象としたがん教育に関する基礎調査（がんのイメージ、がん予防や早期発見などの知識についての学習の希望、いのちの大切さを考えるための授業の機会などの希望、がん予防に関する生活習慣等の理解と実施状況、子宮頸がん検診や予防行動の認識、体験者の講話の受講希望（女子生徒のみ）などについて調査し、ニーズの同定と今後の教育プログラム構築への示唆を得る。

（2）がん教育に関するニーズ調査の同定により、教育プログラムを構築して、ピアサポーター活用による中高生への子宮頸がん予防のための啓発セミナーを実施・評価することにより、今後の学校現場における子宮頸がん予防啓発活動への示唆を得る。

３．研究の方法

（1）沖縄県内の中学校 156 校中、17 校を無作為抽出し、同意の得られた７校の中学 2 年生 1,268 名を対象に、無記名による質問紙調査を行った。調査内容は、がんのイメージ（SD 法）、認知度（９項目）等、女子生徒に対しては、子宮頸がんに対する認知度（7 項目）、検診の受診希望、子宮頸がん教育に関する授業についても尋ねた。有効回答の得られた 820 名（71.3%）の分析を行った。

（2）沖縄県内の高等学校 64 校中、無作為抽出した 12 校のうち、同意の得られた 7 校の高校 2 年生 1,858 名を対象とし、無記名による質問紙調査を行った。調査内容は、がんのイメージ（SD 法）、認知度（９項目）等、女子生徒に対しては、子宮頸がんに対する認知度（7 項目）、検診の受診希望、子宮頸がん教育に関する授業についても尋ねた。有効回答の得られた 1,609 名（86.6%）の分析を行った。

(3) 沖縄県内の中高生のがん教育に関するニーズ調査の結果を同定して、子宮頸がん体験者も参加しての教育プログラムを構築し、ピアサポーター活用による教育セミナーを実施した。有効回答の得られた 38 名のデータを記述的、質的に分析した。
なお、上記調査の実施にあたっては、当大学倫理審査委員会の承認を得た。

４．研究成果

(1) 沖縄県内の中学生を対象としたがんの予防・啓発に関する意識調査結果

対象は男子 427 名（52.1%)、女子 393 名（47.2%）であった。がん・予防についての関心度では、「あまり関心がない」40.2%、「まあ関心がある」38.2%の順であった。がんで家族や大切な人を亡くした経験では、2 割の生徒があると回答していた。がんについての情報源（複数回答）では、「テレビ」と回答した者が 9 割を占め、次いで「学校の授業」、「インターネット」の順であった。がんに対するイメージでは、「暗い感じ」、「苦しい感じ」、「危険な感じ」、「怖い感じ」の項目が高かった。一方、「身近な感じ」の得点はやや低かった。また、がんを怖いと思う理由では、「治りにくいイメージがある」、「がん＝死のイメージがある」、「治療が苦しそう」などが上位を占めていた。がんに関する認識度では、約 9 割の者が、「がん検診がとても大切である」、「たばこを吸うとがんになる可能性が高まる」の項目は、「知っている」と回答し、男女とも同様の傾向であった。

一方、認知度の低かった項目は、「がんの中にはウイルスの感染が原因でかかるがんもある」、「日本のがん検診受診率は他の先進国に比べて 3 割程度と低い」、「子宮頸がんは若い人にも増えてきているがんである」などであった（図 1)。この項目は、男女間で有意差があった。「がん検診を受けられる年齢になったら，がん検診を受けたいか」について、男女共に約 7 割の者が「受けたい」と回答し、がん・予防の授業について受講を希望する者は全体の 80.4%, 体験者の講話を希望する者は 67.2%を占めていた。

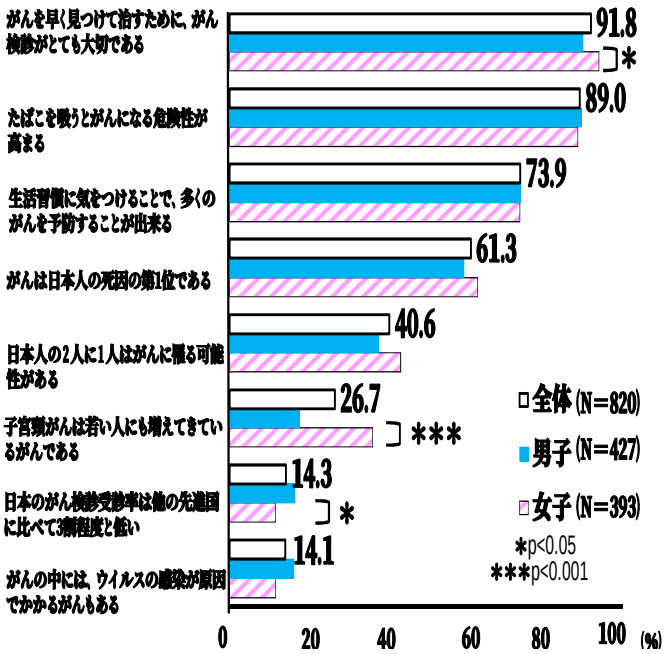

図 1.がんに関する認識度（N＝820,複数回答）

女子生徒を対象にした子宮頸がんに関する認知度(N=393)では、「子宮頸がんは若い世代に増えているがんである」、「タバコを吸うことで子宮頸がんになる危険性が高まる」、「国や市町村は、20 歳以上の女性に対して 2 年に一度の子宮頸がん検診を勧めている」の項目は、2～3 割の者が知っていると回答していた。一方、「子宮頸がんの主な

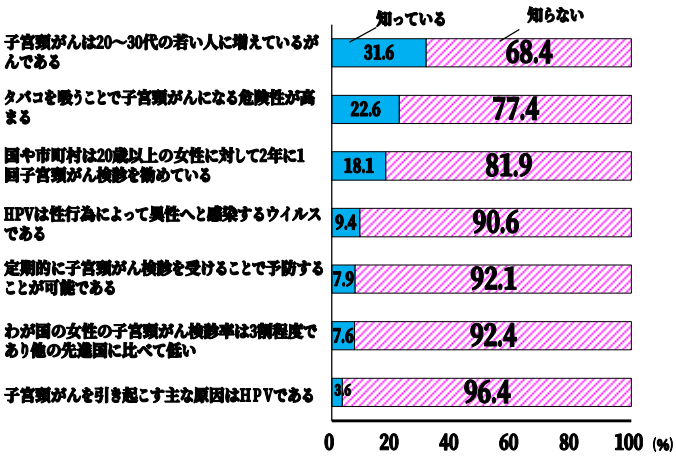

図 2.子宮頸がんに関する認知度（女子,N=393）

原因はヒトパピローマウイルス(HPV)である」、「子宮頸がん検診率は他の先進国と比べて低い」、「子宮頸がん検診を定期的に受けることで予防することが可能である」などの項目は、認知度は１割程度と低かった(図 2)。子宮頸がん体験者の講話や検診について尋ねると, 77.1%が講話を希望し、79.1%の者が「将来，検診を受けようと思う」と回答していた。

（2）沖縄県内の高校生を対象としたがんの予防・啓発に関する意識調査結果

対象の内訳は、男子 801 名（49.8%）、女子 808 名（50.2%）であった。がん・予防に関する関心度は、「まあ、関心がある」49.7%、「とても関心がある」13.2%を合わせると、約６割強の者が関心を示していた。また、これまでにがんで家族や大切な方を亡くした経験があるものは、約 2 割を占めていた。

がんに対するイメージ 8 項目について SD 法を用いて尋ねたところ、「楽な－苦しい」感じ、「怖くない－怖い」感じが 4.7 点と最も高く、「明るい－暗い」感じ、「治りやすい－治りにくい」感じ、「安全な－危険な」感じが 4.6 点、「希望に満ちた－絶望的な」感じが 4.5 点の順であった。一方、「身近な－まれな」感じでは 2.7 点と低かった（図 3)。

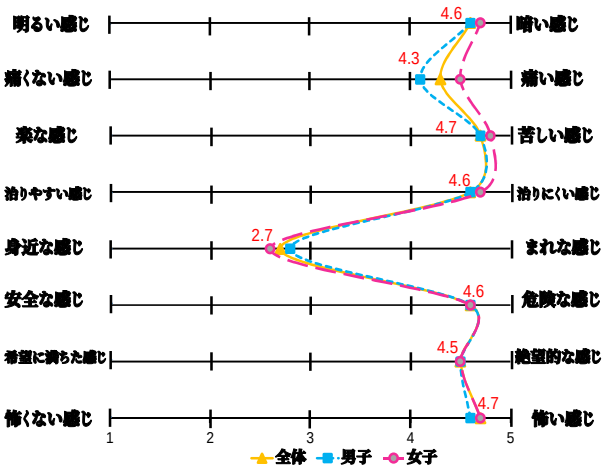

図 3.高校生におけるがんのイメージ (N=1609)

がんに関する情報源について複数回答で尋ねたところ、「テレビ」が 92.9%と最も高く、次いで「学校の授業」45.2%、「インターネット」30.5%の順であった。「映画」、「家族での話題」、「家族や親戚のがん体験者の話」では、男女間で有意差がみられた。がん予防に関する「授業を受けたい」と回答した者は、男子 80.6%、女子 90.5%、「がん体験者の話を聞いてみたい」と回答した者は、男子 66.8%、女子 82.2%と、その割合は女子が有意に高かった。また、「将来がん検診を受けたい」と回答した者は、男女ともに 7 割以上を占めていた。がんに関する認知度について、「知っている」、「知らない」の 2 件法で尋ねたところ、「知っている」と回答した者の割合が高かった項目は、「早期発見・治療にはがん検診がとても大切である」が 95.0%と最も高く、次いで「たばこを吸うとがんになる危険性が高まる」、「生活習慣を整えると、多くのがんを予防できる」の順であった。一方、「ウイルス感染が原因でかかるがんもある」、「日本のがん検診受診率は他の先進国に比べて低い」等は、認知度が約 1～2 割程度と低かった。

女子生徒(808 名)を対象に、子宮頸がんに関する認知度について尋ねたところ、「知っている」と回答した者の割合が高かった項目は、「子宮頸がんは 20～30 代の若い人に増えているがんである」、「国や市町村は 20 歳以上の女性に対して 2 年に 1 回子宮頸がん検診を勧めている」、「タバコを吸うことで子宮頸がんになる危険性が高まる」等であった。一方、「子宮頸がんを引き起こすのは、HPV が主な原因である」、「定期的に子宮頸がん検診を受けること

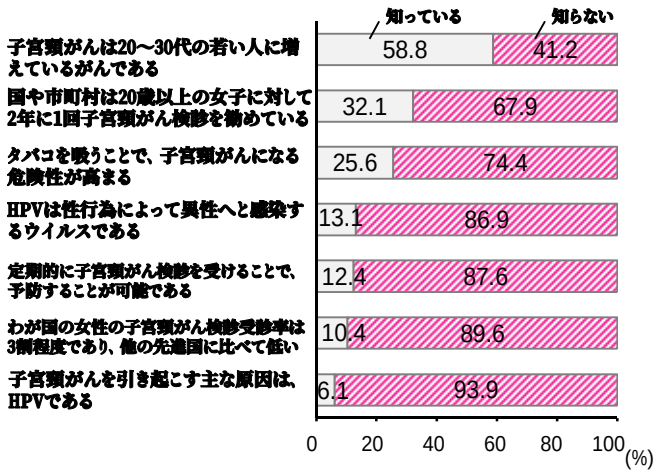

図 4.子宮頸がんの認知度 (女子, N=808)

で予防することが可能である」、「HPV は性行為によって異性へと感染するウイルスである」などは、その認知度が低かった（図 4）。また、子宮頸がんに関する授業を希望する者は 87.1%、体験者の講話を希望する者は 82.4%、「将来、子宮頸がん検診を受けたい」と回答した者は 85.9%を占めており、いずれも関心が高かった。

（3）「あなたの未来ためにもっと知ってほしい！子宮頸がん予防のこと」教育セミナーの実施と評価

2020 年 1 月、ピアサポーターを活用しての半日間の公開講座形式による教育セミナーを開催した。受講者は 40 名であった。10 歳代が 5 名（13.2%）、20 歳代が 7 名（18.4%）であり、両者を合わせると 3 割を占めていた。次いで、30 歳代、40 歳代、保護者にあたる 50 歳代、60 歳代の参加も見られた。

①参加動機（複数回答）は、「親や周囲の人に勧められた」が 7 割と最も多く、次いで、「内容に興味・関心があったから」、「がん教育に関心があった」、「体験者の講話が聴きたかったから」の順となっていた。

②プログラムの内容の理解度に関しては、9 割以上の者が、「十分に理解できた」「まあ理解できた」と回答しており、内容に関しても十分関心がもてたと回答していた。

③受講後は、9 割以上の者が「子宮頸がん予防・早期発見のためには、定期的に検診を受けることの必要性が理解できた」、「子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルス（HPV）による感染が原因で罹ることが理解できた」、「喫煙によって発症のリスクが高まることが理解できた」と回答していた。

④教育セミナー全般についてのアンケートでは、受講者の 8 割以上の者が良かったと評価しており、「新たな知識や情報の獲得に繋がった」、「今後もこのような企画（教育セミナー）は必要との意見が寄せられた。

⑤特に 10 歳代の中学生、高校生の自由記載では以下の意見が挙がった。

- 今まで検診を受けるのが怖くて迷っていたけど、講義を受けて 20 歳になったら受けようと思った。自分で自分の身を守ることが大切と思った。
- 検診の大切さがわかった。家族や友人にも教えようと思った。
- 子宮頸がんについて深く学べたので良かった。勉強になった。
- 自分の将来のためにも検診は、受けないといけないと強く思った。今後は、子宮頸がん検診や予防について、友人や家族に推奨し、少しでも子宮頸がんを患う人を減らすことが取り組めることだと強く思った。
- 子宮頸がんについての色んな情報が学べて参加して本当に良かった。
- 体験者の話は胸に迫って良かった。学校において、「がん教育」としてのがん検診・性教育が必要と思う。
- 予防ワクチンや定期検診を受けることが、とても有効ということを改めて実感できた。友人や家族とも話し合っていきたい。若い時からの「がん教育」が大切だとわかった。
- 学校の授業などでも積極的に「がん」のトピックなどを取り上げてほしいと思う。

⑥本教育セミナーの実施により、参加者の子宮頸がん予防に関する知識の獲得や体験者の講話講話を聴くことで、検診受診への動機づけなどの成果が挙がった。しかしながら、参加者がないなどの課題が残った。今後は、県教育委員会の指導主事や各学校の養護教諭、体育教諭などと連携を図りながら、継続的に教育支援していくことの必要性が示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 神谷優里、桑江光華、照屋典子、砂川洋子	４．巻 49
２．論文標題 沖縄県内の中学生を対象としたがんの予防・啓発に関する意識調査	５．発行年 2018年
３．雑誌名 沖縄県公衆衛生学会誌	６．最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桑江　光華、神谷優里、照屋典子、砂川洋子	４．巻 49
２．論文標題 沖縄県内の高校生を対象としたがんの予防・啓発に関する意識調査	５．発行年 2018年
３．雑誌名 沖縄公衆衛生学会誌	６．最初と最後の頁 35-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 神谷優里、桑江光華、照屋典子、砂川洋子
２．発表標題 沖縄県の中学生を対象としたがんの予防・啓発に関する意識調査
３．学会等名 第49回沖縄県公衆衛生学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 桑江光華、神谷優里、照屋典子、砂川洋子
２．発表標題 沖縄県の高校生を対象としたがんの予防・啓発に関する意識調査
３．学会等名 第49回沖縄県公衆衛生学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yoko Sunagawa, Noriko Teruya, Takehiko Toyosato, Takao Yokota
２．発表標題 Awaneness Survey Regarding Cancer Edukation Among High School Students
３．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Noriko teruya, Yoko Sunagawa, Takehiko Toyosato, Takao Yokota
２．発表標題 Awareness Survey Regarding Cancer Prevention Among Junior High School Students
３．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	照屋　典子 (TRRUYA NORIKO) (10253957)	琉球大学・医学部・教授 (18001)	